

赤谷プロジェクト現地見学 2014年10月21日

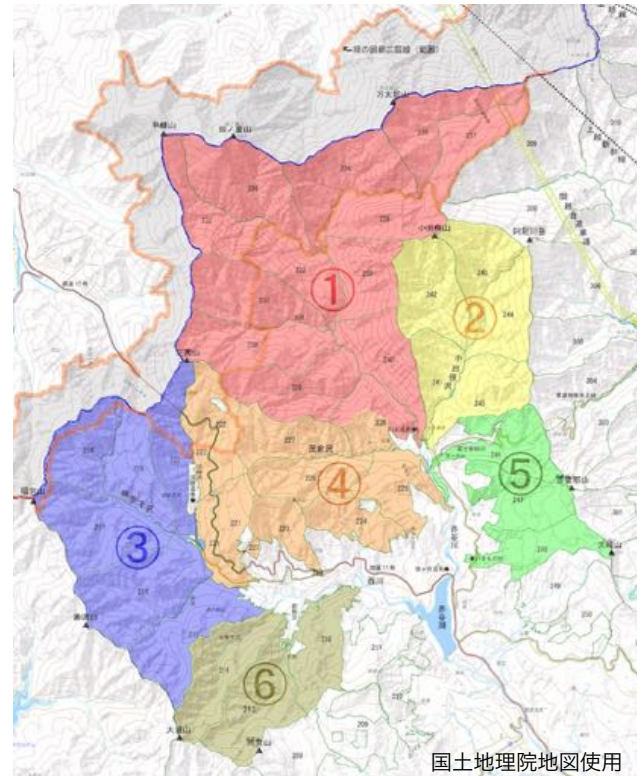
参加者 志賀亞之 勝又幸宣 勝又節子

(レポート 勝又幸宣)

現地案内 関東森林管理局赤谷森林ふれあい推進センター 藤澤将志所長 藤木久司自然再生指導官

赤谷プロジェクトは地域住民(赤谷プロジェクト地域協議会)と日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局が協働で森林の生物多様性復元と持続的な地域づくりに取り組んでおり、私たちNPOと同じ目的の先進プロジェクトである。プロジェクト総合事務局は日本自然保護協会にあり、担当の出島氏を通じて林野庁関東森林管理局赤谷森林ふれあい推進センターに自然林復元の現地見学をお願いした。参加者は志賀副理事長と勝又事務局長、勝又節子会員の3名。志賀副理事長は2007年頃にNPO法人富士山クラブの森林保全プロジェクトメンバーと共に現地を見学している。

赤谷プロジェクトが取り組む国有林は標高約600mから2,000mの10km四方(10,000㌔)に及び、イヌワシの営巣、植生管理と環境教育、水源の森、地域づくり、木の文化の研究、人工林管理経営など、場所ごとの特性に合わせて6つのエリアが設定されている。(右図)



前日宿泊した温泉旅館のご主人はプロジェクト発足の切っ掛けとなったスキー場開発反対運動から関わってこられた方であり、私たちと同じ地元市民の立場からの貴重なお話を伺うことができた。予定外の貴重な収穫であった。



赤谷森林ふれあい推進センターの藤澤所長と藤木自然再生指導官のお二人と赤谷湖畔で合流し、いきもの村に向かう。いきもの村は種苗管理の施設だったものをプロジェクトの環境活動など利用しているとのことであった。ここで身支度を整え四駆車に乗せていただき現地に向かった。

案内していただいたのは、植生管理や環境教育の研究・実践を目的に管理されている区域(地図の②)でカラマツとスギの人工林を幾通りかの幅で带状に伐採して放置し、植物相、動物などの変化を観察している現場である。

小出俣沢沿いの林道を標高850m地点まで上ると正面にカツラの巨木が現れた(写真左上)。数本が合体した主幹は勢いがよく、その周辺を成長した藪が囲んでいる。発酵した落ち葉から甘い香りが漂っていた。巨木は富士山で見慣れていたがそれでも実に見事なカツラである。直ぐ先の橋からは澄んだ水が流れる溪流が見下ろせる。対岸にも大きなカツラが聳え、溪流沿いにはフサザクラが多い。(写真左下)

素晴らしい赤谷の自然の一端を満喫し、林道を引き返して見学場所へ向かった。林道周辺の森は林床にオシダが密生している場所もあれば、チシマザサらしき笹が密生している場所もあった。ここではテンの糞の調査も行われているという。(写真下・左)



車を降りて歩くとカラマツ林と低木の雑木が密生した場所が交互に現れる。8年前にカラマツの人工林を試験伐採した場所だ。何通りか幅を変えて伐採し経過を観察している。カラマツ林に元々侵入していた中低木を主に勢い良く再生していることがうかがえた。伐採の幅が広いほうが全体に樹高が高いとのことであった。(写真上右・下)



伐採地の再生状況



林内に生育していた中高木



藤澤所長(右)から説明を聞く



富士山ではかつてカラマツが「富士山のテンカラ(天然唐松)」として高値で取引されていたこともあり、古い人工林はカラマツが植栽されているところが多い。須山口登山道沿いにも100年以上前に植えられたカラマツ林があるが、林間に様々な樹木が侵入し天然林に近い森へと変化した。

一方、同時期に植栽された須山口登山道沿いのヒノキ林は林床に植生が殆ど見られないという対照的な状態となっている。

(写真=106年生の富士山のヒノキ人工林・474林班)

次はスギの人工林伐採試験地である。スギの林を通過して伐採地へと向かう。林床の土は富士山とは違い黒く細かくてやわらかい。直ぐに大きく開けた伐採地に出た。標高約760mの等高線に沿って幅30m長さ200mに渡りスギが伐採され4年が経過している。空間は低木と草本が埋め尽くし、伐採跡に多種の植物が一齐に侵入し、せめぎ合っている状態である。富士山でも1996年の風倒被害でリセット(攪乱)されたヒノキ人工林跡に、その周辺では見られないような植物までもが一齐に侵入し、瞬く間に地面が植物に覆われるという経緯を辿っている。

動物の調査にはセンサーカメラとコウモリの超音波を記録するバット・ディテクターが設置されている。センサーカメラは全域で50台以上が設置され、動物調査を継続しており、記録はホームページで公開されている。コウモリは多様性復元状況の目安と位置づけており、これまでに10数種類を記録したとのことであった。

さらに上部の試験地に移動する。こちらは標高が約800mで幅が40mと広がっているが、ほぼ同じような状況に見える。大繁殖しているクマイチゴの刺を避けながら南西側の自然林へと向かう。途中には植生保護柵が設置されニホンジカの被食調査も行われていた。柵の脇にイネ科植物の被食痕と糞が見られたが、まだ目立った被害はないとのことであった。



センサーカメラ



バット・ディテクター



植生保護柵



自然林との境界部分

富士山の森づくりは植栽が基本だが、ここでは放置して自然再生に任せ、森の復元を試みている。目指す森は隣接している自然林(写真右)のような森だろうが長い時間が必要であろう。富士山のように攪乱を繰り返している活火山とは異なり、赤谷では安定した落葉広葉樹林が復元すべき本来の森の姿なのだ。

隣接する自然林との境界部分は南側からミズナラの枝が張り出しているため日当たりが悪い。他よりも傾斜が急で風も強いということであった。ここには草本が見られず、幼樹が疎らに生えているだけで表土も幾分失われているようである。(写真右)

富士山クラブ協定林では、この場所のような日陰部分に植栽した苗の成長が良く、日当たりの良い中央部の成長が悪いという結果になっている。陰樹であるブナを主に植栽したことが原因だが、自然再生と植栽を組み合わせれば効率良い森の復元ができるかもしれない。



再生が進んでいない部分

現地見学を終えていきもの村に戻り、昼食後、赤谷プロジェクトについての詳細なレクチャーをしていただいた。短時間であったがたいへん有益な見学をさせていただいた。



いきもの村でレクチャー

1週間後にレクチャー資料を利用させていただき報告会を行った。赤谷プロジェクトの運営、協働のしくみ等などは私たちの活動を進めていく上で大きなヒントとなった。これからも赤谷プロジェクトに注目していきたい。



藤澤所長(中央左)と藤木さん(中央右)

この見学にあたり、お力添えいただいた日本自然保護協会の村杉理事、出島様、貴重なお話を聞かせていただいた湯宿温泉金田屋のご主人の岡田様、そして懇切丁寧に現地案内とレクチャーしていただいた赤谷森林ふれあい推進センターの藤澤所長と藤木様に厚くお礼申し上げます。

NPO法人ホシガラスの会見学者一同

赤谷プロジェクト関連サイト

関東森林管理局 赤谷森林ふれあい推進センター
http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/kanto/akaya_fc/index.html

関東森林管理局 赤谷プロジェクト
http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/policy/business/akaya_project/

財団法人日本自然保護協会 AKAYAプロジェクト
http://www.nacsj.or.jp/akaya/ap_about.html



金田屋さんのご主人 岡田さん